

保育園における物語世界の意味

— 節分を事例として —

吉 岡 一 志

(2008年10月2日受理)

Meaning of the Narrative World in Nursery
— Case study of annual event: SETSUBUN —

Kazushi Yoshioka

Abstract: The aim of this paper is to consider meaning of the narrative world at nursery from children's point of views. This study, particularly, focuses on the narrative world, which brings about fear by emergence of "ONI", a demon that should be away at "SETSUBUN", one of annual events. Therefore, It will be explained the following two concepts by fieldwork research: how narrative world would be formed at nursery, and would be given meaning by children. This research had been conducted at a private nursery in the Chugoku district through January until April in 2007. The observation was mostly based on a three-year-old child class, even occasionally a four or five-year-old child class. Additionally, it was conducted informal interviews with some nursery teachers. As a result, it was found that at nursery the narrative world had been formed by children and nursery teachers each other. Eventually, children had identified his or her growth throughout this world, although children had struggled against the difference between fiction and reality in it.

Key words: nursery, infant education, narrative, fieldwork

キーワード：保育園，幼児教育，物語，フィールドワーク

I. はじめに

本論稿の目的は、保育園における物語世界の意味を、幼児の視点から考察することである。とくに、年中行事の一つである節分を事例に、「鬼」という恐怖をもたらす物語の世界に注目し、こうした世界が保育園でいかに形成され、意味づけられているのかをフィールドワークにより明らかにする。

保育園には、さまざまな形態で物語があふれている。絵本の読み聞かせや語り聞かせだけでなく、それから派生することが多いという劇遊び、さらには、ごっこ遊びや「みたて」による遊びもこうした物語をめぐる遊びの一つと言えよう。多くの保育園でも行われているクリスマスや節分という行事は、「サンタクロ

ス」や「鬼」などという虚構の登場人物をめぐって展開される物語世界であり、保育園では日常的な活動である。

『保育所保育指針』では、ごっこ遊びや絵本、童話などが言及されており、それらを楽しむことがねらいとされている。実際に物語世界を舞台にした保育の実践に関する報告もなされている（岩附・河崎 1987, 加用 1994）。これらのことから、保育園において幼児と物語世界とのかかわりが保育の一部として重要な位置を占めていることがうかがえる。

とくに、クリスマスや節分などの行事は、ごっこ遊びや劇遊び¹⁾のように模倣や「虚構」を楽しむものではなく、一つの「現実」として子どもたちの前に提示される。こうした行事は、物語世界の枠組みこそ伝統

的に決定されているものの、子どもたちが日常世界や物語世界の登場人物に扮しアナザーワールドを体験するというよりも、幼児たちの生活世界における「現実」として物語世界の中に入り込むことが可能となる。そうした意味において、クリスマスや節分における物語世界と幼児のかかわりに焦点をあてることで、幼児の「現実」に対する独自の認識に迫ることができると考えられる。

これまでの先行研究においても、幼児と物語世界の関係には多大な関心が払われており、多くの研究が蓄積されている。なかでも、物語世界の登場人物と幼児のかかわりを虚構と現実の認識という観点からアプローチした研究は、本研究の関心とも近い。杉村他(1994)は4、5歳児にサンタクロース、おばけ、アンパンマンといった「想像物」の存在に対する認識を調査し、大多数の子どもたちがそれらを実在すると考えているという。さらに、4歳児では、大人などの演出者であっても「会う」ことが実在の判断基準であり、5歳児では演出者を偽物と捉えるものの「本物」がどこかにいると認識しているとしている。また、富田(2002)は4、6、8歳児へのインタビューにより、4歳から6歳にかけて「扮装物」を偽ものと認識することが可能であり、6歳から8歳児にかけて空想の存在を非実在と認識するようになると指摘している。

これらの研究は、幼児による現実の認識の発達を明らかにした点で非常に意義深い研究である。しかし、これらの研究は幼児の認識の一側面を検討したに過ぎず、いかに幼児が物語世界とかかわり、それらにどのような意味づけをしているのかという社会的な視点が欠けている。麻生(1996)が指摘しているようにファンタジーの世界は大人によって子どもに与えられるものであり、実際の調査でも、空想傾向の高い子どももほど家庭で「魔法的説明」²⁾がなされているという(富田・山崎 2002, 富田 2003)。すなわち、現実や虚構の認識は幼児の発達の段階にのみ依存するものではないことがわかるだろう。そのため、幼児期の子どもたちが、いかに物語世界を与えられ、その世界に参入しているのかに焦点を当てる必要がある。

これまでも物語世界に幼児が戯れることの意義についてはいくつかの肯定的な指摘がなされている(古庄 1981, 岩附・河崎 1987, 近藤・吉原 2004)。しかし、それらの指摘は遊びを豊かにする、表現力や科学的世界観を形成するなど理念的なものに留まっている。つまり、これらの活動の意味に対する幼児の視点にはほとんど関心が寄せられていない。幼児たちにとっての物語世界の意味は、幼児自身が物語世界をどのように認識し、それを自身の生活のなかでいかに位置づけて

いるかを明らかにすることで捉えることができよう。

まして、「鬼」が登場するなどの恐怖を伴う物語が子どもたちの間で人気が高いことは、研究者や保育者の間ではよく知られていることにもかかわらず、このような物語についてはほとんど研究されてこなかった。いわゆる怖い話は、「お化け」が登場する絵本に見られるように子どもにゾクゾクとした恐怖感を楽しむ物語である一方で、子どもたちを戒める規範体系としても機能している(野村 1989)。このように、怖い話は子どもの人間形成にとって切り離すことのできないう物語であると言えよう。

そこで、本研究では、「節分」を事例として、物語世界の形成過程とその意味づけに注目する。保育園の日常的な行事である「節分」を事例とし、恐怖をともなう物語と子どもたちのかかわり合いを描き出すことで、保育におけるこうした物語世界が担う意味を明らかにしていく。

II. 調査の方法と概要

本調査では、物語世界の形成過程と子どもによるそれらの意味づけを明らかにすることを目的とするため、フィールドワークの手法を用いる。「鬼」が来る「節分」の行事は、保育園に限られたものではなく子どもから大人まで馴染みの深い、いわばありふれた行事である。そこに込められた伝統的、本来的な意味は失われつつあり、イベントとしての性格が強くなっている。このような行事は当たり前のように保育園でも行われ、改めてその意味が問われることのないものとなっている。このようなありふれた日常に入り込み、「文化の記述」(志水 1998)を目的とするものがフィールドワークである。本調査では、この「文化の記述」をもとに、そこから見えてくる意味の世界を描き出すとするものである。

本調査は、2007年1月から4月に中国地方のW保育園にて行われた。W保育園はキリスト教系の私立保育園であるが、日本の伝統行事も盛んに行われている。調査者は、3クラスある3歳児クラスの一つのクラスを基本的なフィールドとしていたが、自由に教室を抜け出し、他の年齢のクラスに出入りしたり、「プレイホール」と呼ばれる園舎二階のホールやグラウンドなどで3歳児から5歳児まで交流することができた。

調査者は、参与していた3歳クラスでは、「おにいちゃん」「おにいちゃん先生」と呼ばれており、読み聞かせやグラウンドでの活動、昼食など、園での一日の活動に子どもたち同様に参加していた。他のクラス

や他の年齢の子どもたちからは「先生」と呼ばれることもあったが、基本的には「遊んでくれる大人」として子どもたちに認識されていたと考えられる。記録についても、できるだけノートへの書き込みは子どもたちの目の届かないところで行い、ビデオ撮影については「節分」当日にのみ「記念に」という名目で行っただけである。

本調査が3歳児クラスを対象としたのは、同園の保育士の助言を受けてのものである。彼女らによると、3歳児は、「鬼」を怖がる気持ちと疑う気持ちが混在しており、その上下の学年はそうした感情がはっきり一方に分かれているとのことだった。そのため、「鬼」あるいは物語世界に対する虚実の判断に葛藤が見られる3歳クラスを対象とすることで、子どもの認識の発達過程がより忠実に捉えられると考えられる。

なお、本文中に引用している保育士や子どもの名前は全て仮名である。

Ⅲ. 分析

1 保育園における物語世界の形成と参入

本節では、幼児たちが参入する物語世界がいかに形成されているか明らかにする。「子どもは虚構と現実の区別がついていない」という常套句がしばしば語られるが、麻生(1996)が指摘するように、ファンタジーの世界は大人によって子どもに与えられる。そこで、本節では物語世界が子どもたちにどのように与えられ、いかにその世界が保育園のなかで形成されているのかを明らかにしていこう。物語世界の形成過程に注目することで、これまでの心理学における子どもの認識の発達とは異なる、社会的な広がりの中で子どもたちの「現実」の認識を捉えることができよう。

(1) 物語世界をつくる保育士

保育園において、物語が子どもに提示される機会の多くは読み聞かせである。保育士たちは絵本を通して、子どもにファンタジーのおもしろさを伝えようとする。W保育園でも、朝や帰りの時間、また延長保育の時間など、一日のうちに何度も読み聞かせの時間が設けられている。次の事例は、朝の「お集まり」の時間に行われた読み聞かせの一場面である。このときの絵本は節分前ということもあり、『おなかのなかにおにがっている』³⁾が読まれていた。

Y先生は読み聞かせの途中に子どもたちに質問をしたり、子どもたちが感想を言うのを聞いたり、中断しながらゆっくり読み聞かせていた。物語のなかで、鬼が子どものお腹の中にいると書かれた場面では、

絵本に書かれている台詞なのかもしれないが「お腹の中に鬼がいるなんて、うそだと思ってるでしょ?」と投げかけた。すると子どもたちは「うん。うん。」と信じているというような口ぶりであった。

2007/01/29フィールドノーツより

このように、保育士によって子どもたちは物語世界を「現実」として受け入れる環境がつくられていく。さらにこの場面の最後にも、「鬼をもらってくれる人はいませんか?」という保育士の問いかけに、子どもたちは「はい」と手を上げて答えていた⁴⁾。また、読み聞かせをしていたこの保育士は、自分の生活を例に出し、自身の体験をこの物語世界の規則で説明をするのである。

Y先生は読み聞かせのあと、自分のお腹の中にも鬼がいるのだという。ご飯を作りたいのだが、めんどくさくて作れないのは、お腹の中に鬼がいるためであると述べる。すると「Y先生にも投げよう」と、豆をまいて鬼を追い払おうと言い出す子がいた。Y先生は自分にも投げしてほしいと告げた。そのうち、子どもたちは「鬼は外、福は内」と口々に言い始めた。

2007/01/29フィールドノーツより

保育士とのこうしたやり取りを通して、子どもたちは提示された物語世界を内面化していくのである。実際、他の保育士の語りのなかに「自分の中の鬼を追い出そうとする年中の子」がいたという証言があり、上記の絵本の物語世界が子どもたちの普段の生活のなかに浸透していることがうかがえる。加用(1994)が提示している事例のなかにも、「やまんば」の特徴を子どもに尋ねると、紙芝居の言葉通り説明をする場面がみられたという。

保育園では、子どもたちは絵本や保育士との相互作用のなかで物語世界を内面化し、「節分」に「鬼」が登場する「現実」を構成していくのである。子どもたちは、「虚構と現実」の区別がつかないのではなく、むしろ子どもたちに「虚構」を「現実」として受け入れさせるような環境が用意されているのである。

(2) 物語世界の虚実をめぐる葛藤

しかし、その一方で、子どもたちはこうした物語世界を無批判に受容しているわけではない。このことは、子どもの認識能力の発達段階が密接に関わっていると考えられる。杉村他(1994)や富田(2002)などの先行研究によれば、4歳児ごろに、保育園に現れるサン

タクロースなどの「想像物」が「偽者」であると判断できるようになるという。W 保育園の保育士の経験では、1～2歳では「鬼が来るから（保育園に）来ない」などと怖がるが、3歳ごろには怖がる子とそうでない子が約半数ずつ、4歳以上になると「鬼」にあっても「どうせ、おにいちゃんなんじゃろ」「鬼なんかおらんし」と怖がらなくなるという。これらの証言は、心理学における一連の研究と概ね一致する。

これらの結果は、認知的発達が進めば「鬼」などの存在を信じなくなるという前提を共有している。ところが、次の引用では、心理的発達のみではなく、子ども自身の経験を通して社会的に「想像物」の虚実に対する判断を学んでいく様子が見てとれる。

- A：「雪ってどっから降るか知ると？」
 B：「……分かん」
 A：「雪ってね。雲から降ってくるんじやって。お父さんが言っとった」
 B：「そうなん？でもな、雨とかは神様が降らせとるしなあ」
 A：「ああ、そっか。でも、雷は鬼が鳴らしょうし。わからんな」

2007/02/02フィールドノーツより

この会話は、「節分」のイベントが終わった後、保護者の迎えを待つ5歳児クラスの女の子三人の会話である。内容は「節分」に現れた「鬼」の虚実ではなく、雪が降るメカニズムに関するものであるが、ここでは物語世界と自然科学との両者の言説をめぐる葛藤が現れている。子どもの周りには、雨の降る仕組みに関して、父親から提示された自然科学による説明とおそらく絵本によって提示されたであろう「鬼」や「神様」などの物語世界による説明の両方が存在していることがわかる。

雨に関する説明は、「節分」に現れる「鬼」とは違い、「偽者」だと発覚するというような経験の場がない。そのため、5歳クラスの子どもたちでも「節分」の「鬼」は虚構であると判断できても、雷を鳴らす「鬼」についてはその虚実の判断はできないのである。

その一方で、子どもたちは「節分」の「鬼」が「偽物」であるという上級生などによる言説にふれることで、経験的に「鬼」が「存在しない」という言説を獲得していくのではないだろうか。すなわち、子どもたちは多様な言説の間で葛藤しながら、支配的な言説による説明を徐々に獲得していくのである。物語世界の虚実に対する判断は、認識能力の発達だけでなく、いかなる言説に触れるかに規定されていると考えられる。

(3) 物語世界の提供と維持

保育士によるステレオタイプ化した子ども像

ところが、保育士など大人は「子どもは虚構と現実の区別がついていない」という言説に拘束されている。先述したように、子どもは成長する過程で最終的に雨が降る仕組みに対する様々な言説のなかから支配的な言説を選び取るのであり、決して物語的説明を自らの意思で積極的に選び取っているわけではない。にもかかわらず、保育士は、子どもが物語世界にのみ入り込んでいくかのように考え、子どもを理解している。

K先生は、読み聞かせの話とは別に、ネコ組の女の子がお守りを作っていた子がいたのだと教えてくれた。K先生は鬼から身を守るために子どもが作ったんだと推測していたが、実際に子どもになぜお守りを作っていたのか尋ねると、「なんとなく」と答えられたと言って残念がっていた。「なんとなく」と答えたのは他の子が作っていたからそれにつられて作っただけで、お守りを作り始めた中心の子は鬼を意識していたのではないかと言う。

2007/02/01フィールドノーツより

この語りは、調査者が、「節分」の調査に来たことを知り、協力をしてくれようとした4歳児クラスの保育士の語りである。この保育士は子どもがお守りを作っていたことを「鬼」から逃れるためではないかと解釈していた。そのため、お守りを作っている理由を尋ねたものの、子どもの「なんとなく」という返答に落胆した様子であった。

また、3歳児クラスの保育士は、「節分」のイベント後、興奮状態の子どもたちを落ち着かせるために、『ないたあかおに（ひろすけ絵本 2）⁵⁾』の絵本の表紙を見せながら、「もう大丈夫よ」となだめる場面が見られた。この保育士の態度も子どもが物語世界に生きていることを前提としたものである。

これらの事例から、保育士たちは子どもを物語世界の住人であると考え、日々の保育を行っていると考えられる。そのため、保育士たちは、子どもたちに物語世界を提示し続けるのである。

子どもによる物語世界への参入の要請

しかし、物語世界は大人側から提供されるだけではなく、子ども側から大人をその世界に引き入れることもある。次の引用は、ままごとで誘われたときの調査者の対応である。

ヒデアキが持ってきたお盆にはふたが固定してあるペットボトルが添えてあった。そのペットボトル

の中には赤紫色の液体が入っていた。私はそのペットボトルを渡されたが、チヒロがそれを横から奪い取り、飲んだふりをした。私が「おにいちゃんなのに」と言うと、「お兄ちゃんのぶんも残しておいた」と手渡した。私もチヒロのように飲むふりをし、「この不思議な飲み物はなあに？」とヒデアキに尋ねた。赤紫色の飲み物はリングジュースなのだそうだ。

私はお腹いっぱいになったので散歩に言ってくるとその場を離れようとしたが、「どこに行くん？」と呼び止められ、その場にいるように言われた。そこで私は「お仕事に行く」と言うと「いってらっしゃい」とヒデアキ。

2007/02/01フィールドノーツより

引用にあるような、ままごと遊びは保育園では日常的に見られる光景である。しかし、このとき調査者は、まだ保育園でのふるまいに慣れておらず、子どもたちの様子を見ながら慎重に子どもたちに対応していた。ふたを固定されたペットボトルを渡された調査者は、どうしてよいかわからずにいたところへチヒロが私からそれを奪い取りふたをしたまま飲むふりをしたことで、ようやく調査者はその後の対応をとることができたのである。

さらに、調査者が「この不思議な飲み物はなあに？」と尋ねたり、また、その場を去りたいときには他の子どもを観察したいと言うのではなく、「お仕事に行く」という言い方をしたのは、子どもが設定したままごとの世界を壊さないようにするためであった。子どもたちの物語世界を壊すことがはばかれたのであり、調査者も物語世界に参入しなければならない「空気」がそこにはあったのである。このような感覚は、調査者自身が「物語世界に生きる子ども」という物語に拘束されていたことの結果なのかもしれない。

このように、保育園における物語世界は子どもたちをまなざす保育士たちによって提供されるだけではなく、子どもたち自身のふるまいによってその世界への参入が要請され、強固に維持されているのである。

2 物語世界における子どもたちの経験

以上のように、保育園のなかで見られる物語世界の形成過程を明らかにした。子どもたちは、「鬼」などの物語世界をめぐる葛藤しながらも、その「虚実」に確信が持てない段階にあり、また一方で保育士たち大人によって物語世界が与え続けられている。そのような世界で子どもたちは、何を経験しているのでしょうか。本項では、「節分」に保育園に現れた「鬼」をめぐる子どもたちの反応を分析することで、保育園における物語世界の意味について検討しよう。

(1) 勇敢な自己の演出

W 保育園では、「節分」が近づくにつれ、「鬼」や豆に関する絵本を読み聞かせたり、「鬼」のお面や人形を作ったりなど、徐々に子どもたちの意識を「節分」に向けさせようとしていた。そのため、調査者と子どもの間でも自然と「節分」や「鬼」の話題になることが多かった。子どもたちの「鬼」の話題に対する反応としてもっともよくみられたものは、「怖くない」という強気な態度であった。

私：「今日これから何があるん？」

ユキ：「今日、鬼がくるんよ」

私：「怖い？」

ユキ：「怖くない。ユキちゃん強いから怖い鬼来たら、ポイ（投げ飛ばすようなそぶりをしながら）ってる」

私：「強いね。怖い鬼が来たら助けてね」

ユキ：うなづく。

2007/02/02フィールドノーツより

上記の引用は「節分」当日の朝の出来事で、私の質問に答えたユキは3歳クラスの女の子である。ユキは怖がるどころか、「鬼」をやっつけるというような非常に勇ましい姿であった。同じ3歳クラスの活発な男の子も同様に「怖くない。やっつけちゃう」と紙を丸めて作った「剣」を振り回しながら答える場面もみられた。このように、「鬼」を怖がるのではなく、むしろ勇敢な姿の子どもたちが圧倒的に多かった。

しかし、このような子どもたちの勇ましい態度が演出であったことが、実際に「鬼」が登場することで明らかになった。

私は倉庫裏がどうなっているか気になって見に行くと、ユキが一人でしゃがみこんで隠れていた。ユキはなしかけても何も言わず、豆をまいてきてほしいといっても無視された。「ユキちゃん行こう」と鬼の方へ誘い出そうとすると「えー、怖い」とだけ言った。助けてくれると言ったはずなのにというと、それでもまた何も答えなかった。ユキはほとんど私と目をあわそうとせず、下を向いたり手元をみたり落ち着かない様子であった。すると倉庫の影から青鬼が見えたので「ユキちゃん、鬼」というとユキはそのまま鬼の方を見つめ動かなくなってしまった。

2007/02/02フィールドノーツより

上の引用は、「節分」の行事のため、ボランティアの大学院生が扮した「鬼」に豆をまこうとグラウンド

に3歳クラス以上のすべての子どもたちが集まっていたことである。グラウンドの端には遊具などがしまっている倉庫があり、その裏は普段からかくれんぼなどの隠れ家となっているところである。「節分」の当日も数人の子どもたちが、その倉庫裏に潜んでいた。

先に引用したユキは、「鬼」を恐れない勇ましい姿であったが、実際に「鬼」が現れると調査者を助けるどころか、一人で身を隠し、震えていたのである。ユキに限らず、朝までは勇ましい姿だった3歳クラスのほとんどの子どもたちは、「鬼」が来たたとたん、しおらしくなってしまった。先述した「剣」を振り回していた、日ごろからやんちゃな男の子も担任の女性保育士の服をつかんだまま、動かなくなっていた。このように、子どもたちは、「鬼」に対して、本当は怖いにもかかわらず、勇敢な自己を演じていたのである。

(2) 自己の演出の背景

では、なぜ子どもたちは勇敢な自己を演じていたのだろうか。勇敢な自己を演じることにどのような意味があるのだろうか。この問いに答えるために、さらに子どもたちの言動を詳しくみてみよう。

先ほどのユキと同じクラスの女の子であるシズカは調査者に対し、よく説教をすることがあった。クラスのリーダー的存在とは言えないが、「○○をしてはダメ」「早く○○して」など、「お姉さん」のような態度をよくみせていた。他の子どもたちほどは勇敢な態度ではなかったが、「節分」当日も、調査者の手を引きグラウンドの倉庫の裏に隠れるとよいのだと誘導してくれた。シズカは始めから「鬼」を怖がっており、グラウンドに出てからも終止不安な表情だった。次の引用は、その時のものである。

一端その場を離れ数分後また戻ると、やはり倉庫裏は子どもたちの溜まり場になっていた。「ここに隠るのは鬼が怖い人?」と聞くと、口々に怖くないのだという。シズカは「寒いから」と言う。私がまたそこを離れウロウロしていると、シズカが倉庫の影から少し身を乗り出し不安そうに外を見ていた。私が近づくと、また倉庫裏へ戻る。「外へ出よう」と声をかけると何も言わず、ただそこから離れることを拒む。

2007/02/02フィールドノーツより

シズカはもともと「鬼」を怖がっていたが、「怖いのか?」という調査者の問いかけには「寒いから」と答えた。このとき、シズカは嘘をついていたのである。当日、「鬼」の準備が遅れ、「鬼」が登場する予定を30

分ほど過ぎていた。その間、シズカは何度か「鬼」の様子を見に倉庫裏から担任の保育士の下へ出てきていたが、年長の女の子の「鬼が来たー」という声を聞き、一目散に倉庫裏へと帰っていったのである。

また、同じ3歳クラスのおとなしい男の子に「鬼怖い?」と質問したときには、「怖くない」と答えたが、彼は調査者の「ほんとに?」という追求に、「怖い。鬼嫌い」と調査者の顔もみずに答えるという場面があった。このような子どもの態度は、「鬼」を怖がることに恥ずかしさを感じていたことによるものではないだろうか。そのため、子どもたちは勇敢な自己を演出しなければならなかったのである。子どもたちが怖がることを恥とする規範意識を持っていたことが、これらの事例から推測できよう。

(3) 下位集団との差異化による成長の証明

以上のように、「鬼」を怖がらない勇敢な自己を演出する背景に恥という規範意識があることが確認された。では、子どもたちのこのような行為が保育の場でどのような意味を持っているのであろうか。ここでは、子どもが大人に対して勇敢な自己を提示するという視点から大人と子どもの相互作用を検討することで、「鬼」をめぐる子どもたちの行為の意味を明らかにしていこう。

「鬼」を怖がらないことの意味

上述したような、恥の意識は、異なるカテゴリーの集団同士を差異化させる上で生じるものである。幼稚園において子どもたちが集団の中で社会化される過程を明らかにした結城(1998)は、教師が上位集団と下位集団を引き合いにだすことで、排斥されるかもしれないという心理的抑圧をかけ、子どもに「自発的な行動修正」を促すと述べる。つまり、年少と一緒にされたくない年長の心理を利用した逸脱修正が幼稚園で見られることを明らかにしている。本調査でも、子どもたちのなかに、下位集団と同定されることを厭う意識があったと考えられる⁶⁾。子どもたちには下位集団と自身との差異を強く意識した子どもたちの姿が次の引用からもわかる。

鬼ごっこにアヒル組のチヒロが入りたいと言ったときである。ナツミから興味深い発言があった。「子どもはいやじゃ」とチヒロの参加を拒否した。その剣幕のすごさにチヒロが泣き出すとともにナツミは「すぐ泣くじゃろ? 3歳は。じゃけいやなんよ」と。私はチヒロをなだめるのに必死だったが、なんとなく曖昧に鬼ごっこを始めた。

2007/03/29フィールドノーツより

この引用は、4歳クラスの女の子が、グラウンドで鬼ごっこを始めようとしていたときに3歳クラスの女の子を「子ども」という理由により拒絶した場面である。引用からわかるように、4歳クラスの女の子にとって「すぐ泣く」3歳児は下位集団であり、一緒に遊ぶ仲間集団として受け入れられないという強い意識がうかがえる。つまり、上位集団の子どもたちは、「すぐ泣く」「子ども」を軽蔑し、「お兄ちゃん／お姉ちゃん」である自分たちとの差異化を図っているのである。それとは反対に、子どもたちにとって「鬼」を怖がらない勇敢な態度は「お兄ちゃん／お姉ちゃん」であることの証明であり、成長の証となっていると考えられる。

成長の確認

さらに、この子どもたちの成長の証明は、保育士や調査者に向けて発信される。「節分」のイベントが終わり、子どもたちが教室に戻ったころ、4歳クラスの女の子が調査者に向かって「泣かなかったよ」と得意げに話しかけてきた。また、保育士からも「怖くなかったと言いながら目を潤ませている子がいた」との笑い話があった。

「節分」以外にも、勇敢な自己の姿を報告する場面がいく度もみられた。調査者が『三びきのやぎのがらがらどん』⁷⁾を子どもに読み聞かせていたときのことである。この物語にはやぎを食べようとする怖い「トロール」が登場するのであるが、読み聞かせの途中に「怖くないよ」と子どもたちのなかから声があがった。

これらの事例は、子どもたちが調査者や保育士などの大人に、怖がらない、泣かない勇敢な自己の姿を報告しようとしたことを示している。このような子どもたちの行為は、自身が「お兄ちゃん／お姉ちゃん」であることを調査者や保育士に承認してもらおうとしたものではないだろうか。

というのは、子どもの勇ましい態度は、保育園のなかで賞賛されるものとして扱われているためである。「節分」のイベント後、保育士の一人が感激した様子で園長先生に勇ましい子どもの姿を「がんばろうと思うんですね。『退治してくる』って」と伝えていた。このように、子どもたちの勇敢な姿は保育士にとって子どもの成長を知るといふ側面がある。そのため、保育士は子どもの勇敢な態度を普段から賞賛していると考えられる。先述した事例にもあるように、調査者自身も勇ましい態度のユキに「強いね」と賞賛の言葉を送っている。

これらのことから、子どもたちは、勇ましい姿を賞賛される成長の証と捉え、反対に「鬼」を怖がり泣いてしまうことを未熟な自己として恥じる規範が内面化されていると考えられる。そして、成長している自分

を承認してもらうため、「節分」のイベントを通して保育士や調査者など大人たちに勇敢な自己を演じてみせるのである。

IV. おわりに

以上、本稿では保育園での「節分」を中心に物語世界の形成過程とその意味を検討してきた。保育園における物語世界は子どもと大人の共同作業で作られており、子どもたちはその虚実と葛藤しながらも、物語世界を通して自己の成長を確認していることが明らかになった。保育園で形成された物語世界は、子どもたちがただアナザーワールドを楽しむためだけのものではなく、子どもたちが自らの成長を保育士など大人に証明する場を提供する機会となっていた。

保育園における物語世界が子どもたちにとって成長を示す場となっていたことは、それが一つの「現実」として子どもたちの生活世界を構成していたからである。たしかに、「鬼」が登場する物語世界は、虚構にすぎない。しかし、この物語世界は保育士たちの不断の努力により「現実」として子どもたちに提示され、その世界のなかで子どもたちは生活をしている。このことによって、保育園全体の意味が書き換えられていくのである。

小学生による「学校の怪談」の受容を分析した吉岡(2008)は、子どもたちが「学校の怪談」を語ることで学校のなかの特定の場所を恐怖で意味づけていることを指摘した。これと同様に、保育園でも「節分」の物語が保育園のあらゆる場所や人間関係の意味を包容させていると考えられる。

例えば、なんでもない場であった保育園が「鬼」が来る怖い場所に書き換えられたために、「鬼が来るから(園に)来ない」という子どもがいたという。他にも、「鬼」が来るグラウンドを避け自分の教室に逃げ込む子どもがいたり、見つかることを前提としたかくれんぼとは異なり、絶対に見つかることのない隠れ場所を発見したりと、均質的な保育園という空間が、恐怖で意味づけられた場所や安心できる場所として重厚な空間へと変容するのである。

さらには、「鬼」が来たとき、3歳クラスの子どもたちは保育士の手や服をしっかりと握りしめその場を離れようとしなかった。「鬼」の登場を機に、それまでただの担任の保育士であった大人が、自分を守ってくれる頼れる存在として書き換えられたのである。もちろん、保育士—子ども間だけでなく、子ども同士でも新しい人間関係が形成される。わがままでいじわるだったある男の子が、「鬼」を怖がっている女の子を

優しく励ましている場面がみられた。その男の子は、このことで、子どもたちの間でも、保育士の間でも新しい評価がなされることとなるだろう。

以上のように、「節分」を事例に、保育園における物語世界の意味を考察したが、物語世界は保育園という空間や人間関係に新しい意味を付与していることが示唆できた。こうした場所や人間関係の意味の変容をもたらす物語世界は、保育園をただ繰り返される日常から子どもたちを解放し、生き生きとした生活を子どもたちに提供することができるのではないだろうか。

本調査は4ヶ月間という短い調査期間の上、「節分」の一週間ほど前から開始されたものである。そのため、「節分」前に子どもや保育士たちの様子が十分に把握できていたとは言えない。今後さらに長期間に及ぶフィールドワークを行い、保育園の実状を把握した上で調査に臨むことが必要であろう。その際、保育士への入念なインタビュー調査も行うことで、子どもと物語世界の関係をより多角的に検討することが期待されよう。

【注】

- 1) 架空のストーリーを創作する遊びを「虚構の遊び」という観点から考察した古庄(1981)は、劇遊びを「一方的に押しつけられ」るものとして、「虚構の遊び」と区別する。しかし、岩附・河崎(1987)の事例のように、劇遊びが本来の物語の設定を超え、保育士や子どもたちの想像力によって多様に書き換えられることも可能である。
 - 2) 例えば、子どもに自動ドアの仕組みを尋ねられたとき科学的回答ではなく、「魔法である」などとの回答をすることを言う。
 - 3) 『おなかのなかに おにがいる』(作:小沢孝子, 絵:西村達馬, ひさかたチャイルド, 1982年)の概要は、おなかに「おに」がおり、それが子どもを「なきむし」や「へそまがり」にしているため、その「おに」を追い出そうというもの。
 - 4) 実際に子どもたちが、鬼がお腹の中にいることを信じているかは定かではない。それは、あらかじめ子どもは物語の内容を知っており、「うそだと思ってる?」という質問の意図とは別に、物語の展開を知っていることを主張したのかもしれない。
 - 5) 『ないたあかおに(ひろすけ絵本 2)』(作:浜田廣介, 画:池田龍雄, 偕成社, 1965年)の表紙には、雲に乗った「あかおに」が山の上を飛んでいる絵が描かれている。そのため、「鬼」を怖がる子どもたちに「鬼はいなくなった」と伝えるために、この絵本が提示されたものと考えられる。
- 6) 結城(1998)では排斥されるかもしれないという心理的抑圧が逸脱修正を誘導すると指摘するが、本調査では、子どもの恥の意識が働いたといえる。調査者自身、「赤ちゃんみたい」と言うことで子どもたちの逸脱を修正したことがなごももあったが、いずれも効果的であった。このことは、子どもに下位集団扱いをされることを恥じる意識が内面化されていたことが推測できよう。
 - 7) 『三びきのやぎのがらがらどんーノルウェーの昔話(世界傑作絵本シリーズーアメリカの絵本)』(作:マーシャ・ブラウン, 訳:せたていじ, 福音館書店, 1965年)。

【引用・参考文献】

- 麻生武, 1996「現実とは何か」『ファンタジーと現実』金子書房。
- 岩附啓子・河崎道夫, 1987『エルマーになった子どもたちー仲間と挑め, 心踊る世界に』ひとなる書房。
- 加用文男, 1994『忍者にであった子どもたちー遊びの中間形態論』ミネルヴァ書房。
- 近藤真弓・吉原邦明, 2004「絵本の読み聞かせから、劇遊びへの活動の展開を通して——自信をもって表現を楽しむ幼児を育てる」『児童教育研究』13, 安田女子大学児童教育学会, pp.9-12。
- 志水宏吉, 1998『教育のエスノグラフィーー学校現場のいま』嵯峨野書院。
- 杉村智子・原野明子・吉本史・北川宇子, 1994「日常的な想像物に対する幼児の認識ーサンタクロースは本当にいるのか?」『発達心理学研究』5(2), 日本発達心理学会, pp.145-153。
- 富田昌平・山崎晃, 2002「幼児期の空想の友達とその周辺現象に関する調査研究(1)」『幼年教育研究年報』24, 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設, pp.34-39。
- 富田昌平, 2002「実在か非実在か:空想の存在に対する幼児・児童の認識」『発達心理学研究』13(2), 日本発達心理学会, pp.122-135。
- 富田昌平, 2003「幼児期の空想の友達とその周辺現象に関する調査研究(2)」『幼年教育研究年報』25, 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設 pp.79-86。
- 野村美優紀, 1989「妖怪の誕生と生活世界の合理化ー不可解な現象の解釈という行為ー」『仏大社会学』14, 仏教大学社会学研究会, pp.28-42。

古庄高, 1981「幼児の遊びにおける虚構の世界」『神戸女学院大学論集』27(3), 神戸女学院大学研究所, pp.43-63。

結城恵, 1998『幼稚園で子どもはどう育つか』有信堂。

吉岡一志, 2008「『学校の怪談』はいかに読まれているか——小学生へのアンケートをもとに」『子ども社会研究』第14号, 子ども社会学会, pp.129-141。

(主任指導教員 山田浩之)